

もろくの笠の中に、綾蘭笠のごとくたはやかなるはなし、されば弓射るにもさはらず、まして馬など走て射るには、笠の右のふちひるがへりて、弓の弦つゆさはらず、さればこそ流鏑馬にはかならずこれを用ゆ也、昔の武士は常に心用意深く、略中旅はさらなりか、道のほどあるには此あやの笠を著たるべし、此笠もはら雨よくる料にはあらで、日をさくる料なり、久しく日にてらざるれば、目かすみなどして、弓なども射にくければ也、石山の緑記の繪には、雪うすたるつに、綾蘭笠著たるをかきたれば、堪んぼどは是を著てやあり、且前九年、後三年などの繪にも、た、けん、されどいたく雨ふらんには著つべうもあらず、略中略且前九年、後三年などの繪にも、た、かひの場に、此笠を用ひたるを所々にかきたる。略中さて古き繪に此笠をかきたるをみれば、姿種々なり、是は今の菅笠なども、人のこのみによりて、すがたさまざまなるがごとし。

〔安齋隨筆 後編九〕一あやの笠の事 或は麥わらにて作り、或は藤にて作り、或は檜のうす板にて組て作る、いづれも本式あらざる歟、按るに古書今昔物語などに綾蘭笠とあり、又あやのがさとあり、蘭は疊の衣に織る草也、の字は蘭の假名也、後三年合戦の繪に、あやの笠をもへぎ色に彩色したり、蘭の色青きゆへなるべし、又文安御即位調度の圖には、色うす黄に少し赤みある色に色どりたり、是はびりやうの葉にて、笠の上を茸るなれば、びりやうの葉のかれたる色也、あやの笠のふるき圖は、右の御即位の圖をもつて正とすべし、其圖左のごとし、略中又按笠の大サは、徑一尺二寸計もあるべきか、略後三年の繪に見えたるは小々見へたり、人形ノ大サをもつて大形小をいふ也又笠のうへのつのは、あまりふとくは有べからず、冠の巾子ほどもあるべし、古の人は頂の上に髻を置候故、もとゞりを入んが爲に巾子あり、笠にももとゞりを入べき爲に、つのを立たり、後三年の繪に、つのを紐にてゆひし形見へたり、是つの、上より髻をむすびて、笠を留めをくべき爲なるべし、然ればツノはふとくつくるまじき也、田樂法師の笠にはツノなし、今も祭の田樂笠にはツノなし、田樂笠には風袋あり、是は舞をどるにひらめきて、風流あらしめんが爲に、風袋を付たる